

親を生涯発達の観点から捉える試み ——乳幼児期の親の発達について——

Parental development can be examined from
the viewpoint of life span development
: The development of parents who
bring up young children

林 昭 志
Hayashi Shoji

要 旨

本研究では、まず親にとって子育てが困難になっている理由を考察し、子育て支援と親の発達の関連性について述べた。次に親の発達を発達段階的に捉えること、また親の発達を生涯発達の観点から捉えることの必要性に関して述べた。さらに親の性質に関する用語として、親性、母性、父性、養護性などを取り上げ、用語の整理を行った。次に親の何が発達するのかということに関して、人格的な側面と認知的な側面の2つに大きく分けて、発達する内容について述べた。また子どもの人数や子どもの性別の違いによって、親の発達課題に違いがでてくる可能性についても言及した。さらに親の発達を促すための働きかけについて、発達を促す立場からの原則を述べた。最後に乳幼児を育てている父親と母親を1組のペアとしたアンケート調査の試みを報告した。その結果、本研究では乳幼児を育てている親の子育ての負担感が大きいことなど、従来からいわれていることを再び示すものとなった。子育て支援においては子育て負担や不安の軽減がやはり重要な事項であると考えられた。

Key Words : 親の発達、生涯発達、乳幼児期、子育て支援、発達の支援

1. 親にとって子育てが困難なのは

現在、子育ての困難さが広く知られるようになり、子育て支援が叫ばれるようになっている。では子育てはなぜ困難なものなのであろうか。まずほとんどの親は親になるための学習をしていないと言われていることが挙げられる。初めて子どもを育てることは「無免許運転」をして

いるようなものであるという指摘がある(汐見,2000)。たしかに初めて赤ちゃんを抱いて世話をすることは慣れないことをしているため、試行錯誤の連続であるし、初めから無謀なことなのかもしれない。

しかし2人目、3人目の子どもを育てていて子育てに慣れていると思われる親にとっても子育てが負担になっている。だから子育てが負担になる別の理由として考えられるのは、子育てが親の人生の長期にわたるもので、多大な時間と労力と費用を要するものであることである。子育ては親の人生に深く関わり、子育ては失敗しても嫌になっても途中でやめることができないものである。子どもがいる以上は一緒に生活し人生を歩んでいくしかない。

しかしこうした問題は過去の子育てにおいても同様であった。だから現代ならではの困難さの説明として、少子化・都市化が進んでいることが挙げられる。子どもを2人くらいしか育てなくなった時代なので、常に長子の新しい発達的な課題に取り組んでいて、子どもの発達の変化についていくのが大変だからなのではないだろうか。

子育てとは親にとっては子どもの発達とともに常に新しい課題に直面する一回限りの生成的な過程である。長子の子育てに対しては初めてのことなので何かと不安や緊張、新鮮さを感じやすいものである。親の発達は子どもの発達と密接に関わりあっており、相互に影響しあっているものであるので、このように複雑な問題が生じてくる。

2. 子育て支援と親の発達

このような子育ての困難さを背景に、近年は子育て支援が叫ばれるようになり、様々な施策が行われるようになった。特に子育て支援としては乳幼児期を対象としたものが多い。この乳幼児期を対象とした子育て支援においては子どもそのものだけでなく、子どもを育てている家庭や親を支援しようとしているものも少なくない。

こうした家庭や親を支援しようとする動きの広がりの中で「子育て支援は親をダメにするのではないか」という危惧が支援の現場で生じているという(大日向,2005)。つまりこれまで必要のなかった、主に母親が担ってきた子育てを支援することは現代の親たちを甘やかしてしまうことだ、とか、今どきの母親は自分の力で子育てができなくて情けない、という意識が、一般の人々だけでなく、子育て支援の現場の人々にまで存在しているということである。

こうした現象はなぜ生じているのであろうか。それは、子育て支援の必要性の認識に問題があることはもちろん、子育て支援が親の発達にどのようにつながっているのかが明確になっていないからではないのであろうか。子育て支援を通じて親がどのように発達するのかということがよく知られていないのではないだろうか。またはどのような子育て支援を行えば、親の発達を促すことができるのかということが知られていないからではないだろうか。

そもそも子育て支援とは親の育児の負担を減らして子育てに喜びを感じられるようにするという側面と、親と子どもの両方の健全な発達を促すという側面の2つがあるはずである。近年さかんになった子育て支援においては、前者の育児の負担を減らす側面はもちろんのこと、後者の親子の発達支援の側面をも重視する必要がある。

この後者の親子の発達を促すことには長い時間がかかる可能性があるものである。なぜなら発達を考えるとはその人間を生涯的な観点からみていくことだからである。

たとえば発達を考えると目先の成果を追い求める教育的働きかけや指導が生涯にとってどういう意味があるのかを考えることである。今日もしもこうはたらきかけたら、明日はこういうことができるだろう、しかしこうして獲得されたことによって、人生において逆に失われてしまったものはないだろうか、と考えることである。

またたとえば幼児期に学習・訓練することによって、子どもらしい幼児期が失われてしまうかもしれない、さらに、児童期・青年期になってからその子は失われた幼児期を心理的に求めるようになるかもしれない、ということを考えてみることである。

塞翁が馬ということばがあるように人生は紆余曲折するものなので、なにが吉で凶となるのか最後までわからないところがある。要するに発達的な考え方をすれば、これまで自明のこととされている子どもへの働きかけを見直すことになり、より大きな観点から子どもへの関わり方を考えることになる。

ところが現状では子育てを通して親が発達していくことを意図した研究はまだ少ないし、親の発達に関する研究は子どもの発達の研究に比べるときわめて少ないため、親子の発達の過程についてはよくわかっていないのである。

したがって親の発達を促すためには何をすればよいのかが明らかになっていないので、子育て支援においては親に対しての発達を促すはたらきかけが難しいのであろう。親の発達に対してどのように支援していけばよいのかを明らかにするためには、子どもの発達についてだけでなく、親の発達の道筋や親の発達のメカニズムの解明が求められている。

3. 親の発達段階について

子どもの発達に段階があるように、親も子育てしながら段階的に発達していくことが想定されてもよいと考えられる事実がある。

たとえば子どもが乳児期から幼児期へと変わるときには、親はこれまでの子どもに対する見方を変える（子ども観の変化）必要があるし、見方を変えざるを得ないこともある。幼児期になれば、子どもは自我を主張するようになり、親が子どもへのかかわり方を変化させる必要が生じる。

また同様に、児童期から青年期へと子どもが発達するときには、子どもにとっては親離れが、親としては子離れが必要になる。そのような大きな質的な変化の際には、親の子ども観が変化しているのである。こうした親の子ども観の変化は親の子どもに対する見方の発達であると考えられる。

また出生順位と性格についてはよく知られているがこれには親の発達の变化がよく現れている。長子的性格としての慎重さやまじめさには、親が初めて子育てを経験する際の慎重さや緊張感、ときとして不安感が反映されている。次子の場合は、親は自信をもって子育てすることができるので、子どもをより一層かわいがると同時にあまり干渉しなくなる結果、甘えん坊で

社会的、快活な次子的性格が形成されるのである。もちろん、次子は長子の行動を観察して学習するということもあるが、親の養育態度がきょうだいで異なってくることは、親の養育態度や子育ての技術の発達を示すものであるし、子どもに対する見方が発達していることを示していると考えられるのではないだろうか。

4. 親の生涯発達について

このように親の発達は親の生涯にわたるものであるだけに、親の発達を生涯発達の観点からとらえることの意義があり、それは2つある。

ひとつは成人期から高齢期にかけての大人の発達と重ねることができるという利点である。これにより成人期から高齢期にかけての大人の発達の研究成果を親の発達の研究に生かすことができる。そもそも親は親であると同時に大人である。だから親の発達は成人期の発達と重なり合っている。

もうひとつは高齢期の生涯発達心理学において言われてきたように、人間の能力の一方向の進歩・向上・獲得を示す変化ではなく、停滞や退歩も含みながら変化していく発達をとらえることができるという利点である。

停滞や退歩も含むという後者の意義は、子育ての実態・現実をとらえやすくすることにある。子育てには疲労や停滞や失敗がつきものである。だから困難な子育ての実態を捉えることのできる理論が必要である。親の発達においては子育ての失敗を捉えやすくすることができる、また子育てのストレスによる疲労によって生じる進歩していない状態を捉えることができる理論が求められている。よって進歩・向上・獲得だけよりも、進歩・向上・獲得に加えて退歩・停滞を含んだ理論的枠組みの方が適している。

5. 親の性質に関する用語

次に親の性質に関する概念を整理しておく。

母性とは「女性が、母親として自分の生んだ子を守り育てようとする本能的性質（新明解国語辞典第三版 三省堂）」とされる。一方父性とは、父親としての性質とされる。このように母性や父性は、父は強く、母はやさしく、というような性別役割的な意味合いを持つ可能性のあることばである。

そこでジェンダーフリーの概念として親性がある。親性は“親が自分の子どもを養い育てようとする性質”として定義される。このように母性ということばの代わりに性別分業的な意味のない親性が使用されるようになった。

一方養護性とは、人として幼い子どもを守り育てる性質とされる。しかし養護には、幼く弱い者、子ども、病人などを保護し世話していくという意味がある。だから養護性とは、厳密に言えば対象を子どもに限らず、力のない弱い者を守って養っていく性質のことをさす。だから養護性は親性よりも対象が広がっている。保育者は乳幼児の世話に関する専門家であり、養護性を高めることが求められている。

エリクソン (Erikson, E.H.) の生産性 (世代性、生殖性) とは、ものや財を作り出すというだけでなく、次世代を育てるという意味があり、親のもつ性質として必要なものである。

以上より親の性質としては、母性と父性とを統合した性質として親性をまず挙げることができる。そして親性をもつべき性質として、養護性や生産性などを挙げることができると考えられる。

しかし親性をもっと多くの性質をもったものではないだろうか。そこで親としての性質とはいったい何だろうか、親はどんな性質をもつとよいのか、という問題について考えたい。

6. 親の何が発達するのか

次に親としての性質とはいったい何だろうか、親はどんな性質をもつとよいのか、という問題について考えていくために、まず親の発達の内容について考えることにする。

ここでは先行研究を参考にしながら、親の発達を人格と認知の2つの側面からみていく。

親の発達を示す「親性」は親が子どもだった頃からすでに発達しはじめており、親の発達には個人差がある。親の発達は生涯発達の観点から捉えられる。また子どもの誕生に伴う生活や生き方の変化により、親の人格の変化だけでなく、ものの見方や考え方に変化がみられる。よって親への援助は親の人格的発達や認知的発達を促すものが必要である (林, 2005)。

柏木・若松 (1994) によれば、親となることによって人格的な面で発達した領域として、「柔軟さ」、「自己抑制」、「運命・信仰・伝統の受容」、「視野の広がり」、「生きがい・存在感」、「自己の強さ」の6つを挙げられるという。

また親には「養護性」(小嶋, 1989) といった発達課題がある。これは、幼いものや弱いものを慈しみ守り育てようとする態度や技能のことである。

次に親の発達を人格と認知の2つの側面からみていく。

① 人格

親の人格の発達において発達する可能性のあるものは、「自己抑制」、つまり自己のコントロールと、「自己の強さ」、つまり忍耐力や責任感である。子育てには忍耐や責任感が必要であるからである。

また親の社会性については対人関係の能力、コミュニケーションの能力が挙げられる。親の対人関係能力は夫婦関係や親子関係を良好に保つ上で重要なものである。

また親が自分自身について持つ実感として、アイデンティティが確立することが考えられる。

また子育てを通して「生きがい」を感じることも考えられる。また子育てを通して成熟した人格となる可能性が考えられる。

② 認知

次に認知の側面の発達について述べる。親にとって必要な認知発達とは、まず「柔軟さ」と「視野の広がり」が考えられる。考え方がこれまでよりも柔軟になったりすることである。

また多くの視点を統合して、物事を考えるようになることが挙げられる。子どもの変化を

理解するためには、あるいは子どもに対する見方を変えるためには、これまでの考え方にとられずに自分の考え方が多元的になることが必要である。

また知識・スキルの増加も挙げられる。子育てを通して、子どもについての知識が増えたり、技術が高まったりすることが挙げられる。

また子どもの人格の尊重を理解するようになることも認知的な発達的变化として挙げられる。

このように親としての性質は親の発達の内容と関連性があり、それぞれの文化によっても異なってくるが、ここでは人格的側面と認知的側面を挙げる事ができた。

7. 親の発達課題の違い

子どもの発達課題についてはよく知られているが、親の発達課題については今後の研究に委ねられている。そこで次に親の発達課題の違いについて考えたい。

まず親が育てている子どもの人数の違いによって、親の発達課題が異なってくる事が考えられる。たとえば、子どもの人数が1人の場合と2人の場合とではきょうだいへの対応などが異なると考えられる。子どもの人数が1人の場合は、きょうだいがいないので、親はきょうだい関係に取り組む必要はない。ただし子どもの家庭の外の友人関係などを考慮することは必要である。

しかし子どもの人数が2人になると家族の人間関係が複雑になり、子どもを世話する負担の増大への対応や、経済的負担の増大への対応のほかに、きょうだい関係に起因する問題への対応が必要になる。このように子どものきょうだいの有無により親の発達課題が異なる。このことは同居する家族の人数によって親の課題が異なってくることを示すものでもある。

また子どもが男児か女児かによっても親の発達課題が異なってくる可能性があるかもしれない。子どもの発達には男女差があるから、子どもの取り組む発達課題の違いが親の発達課題の違いとなって現れるのである。

たとえ基本的には子どもを育てることは共通の課題があつて、本質的には変わらないといえるが、子どもの人数や男女の違いによって、親が子どもとともに生涯にわたって取り組まなければならない課題が異なってくることから、親の発達課題は多様性を持つものとなると考えられる。

8. 親の発達を促すための働きかけ

それでは親が発達するのはなぜか、すなわち発達の原動力は何かということを考えてみる。まず考えられるのは、日々の子育ての経験の中で学ぶということである。つまり子育て経験の中での自覚や気づき・洞察などがあるということである。

次に周囲の環境からの影響である。たとえば、親の両親のアドバイス、母子手帳などによる知識の習得などが挙げられる。親の子育てに対する周囲の働きかけでは、教育や指導ではなく支援や援助が必要とされているが、親の発達のためと考えて、上から見下ろして親に指導して

しまう危険性がある。

しかし子育て支援の考え方は親への指導・助言でなく支援・援助・サポートであり指導するのは誤りであり、特定の親子の現実を関係者が対等の立場で協力し持ち味を生かしながらも一緒に取り組んでいく態勢が求められている。

発達することは学習や技術の習得とは異なる。学習であれば、教育や訓練や指導をしていくのがよい、という発想になってしまうが、発達であるので、親の主体性を尊重しながら見守っていく姿勢が必要であるということになる。

9. 乳幼児期の親を対象とした調査の試み

1) 問題

乳幼児を育てている親は子育てを通して発達しているという意識・実感はあるのだろうか。そこで本研究では、親が子育てを通して発達していく過程を捉えるために、親（母親だけでなく父親に対しても）に対して調査を行った。

特に、従来は母親のみを対象とした研究が多かった中で、本研究では母親と父親の1組をサンプルとしている。しかし父母のペアの研究はサンプル収集において難しく、本研究ではサンプル数が少ない。また母親のみしかデータが収集できなかったサンプルもある。このような点は今後の課題であるが、両親（夫婦）を対象とした研究の試みとして調査結果を報告する。

2) 方法

乳幼児健診を利用して保護者の方にアンケート用紙を配布し調査にご協力いただいた。またその他の身近な保護者の方にもご協力いただいた。

質問項目の作成に関しては先行研究（柏木・若松、1994）を参考にしたり、自作したりした。サンプルは母親が20名、父親が16名、合計36名である。子どもの年齢は1歳未満から6歳以上までと幅があるが、1歳以上4歳未満の範囲が中心的な年齢となっている。子どもの人数は1人から3人であるが、1人が20名、2人が13名、3人が3名であり、1人ないし2人が大半を占めている。

3) 結果と考察

① 全体的傾向について

子育ての負担感について、子育ては大変だと思うが大多数を占めた。しかし子どものせいで時間が足りないと思うについては、「いいえ」「わからない」が多かった。また夫または妻は子育てに熱心であるは、「はい」が大多数を占めた。

子育ての不安感について、子どものことで心配なことがあるが大多数を占めた。また、これからどうなるのか不安を感じるは、「はい」と「わからない」が多かった。また子どもがもう少し大きくなれば子育ては楽になると思うは、「はい」が多く、子育ての負担の軽減を期待しながら子育てしていることが考えられる。

以上のことより、子育ての負担感や不安感は大きく、子育て支援の必要性が示されていると思われる。これからの子育て支援においてはやはり、子育て負担や不安の軽減を重要視していくことが必要であると考えられる。

子育て期の幸福感については、子どもとあそぶのは楽しいが、多数であり、また、子どもがいて幸せを感じるも多数であった。よって子どもの存在に対しては、多数が幸福を感じていると思われた。

② 父母別の分析

次に、父母別に質問項目の回答を分析した。この結果、母では「自分の父や母とよく話」しており、父は自分の父母とあまり話していないことが明らかになった。統計的な確率検定を試みたところ、有意な値を得た。(カイ二乗値 13.53 自由度 2 P 値 0.0011) 親が自分の父母とよく話すことは、子育てのサポート源として有益なものになりうる。母親の方が自分の父母とよく話すということは、男女差の現れであるだけでなく、母親の方が子育てを担う立場になっていて、実家の支援をよく受けていることとも関連があると思われる。

③ 子どもの人数別の分析

次に子どもの人数と質問項目の回答との関連を分析したところ、子どもの人数が「親になって考え方が柔軟になった」との関連があることが示された。ここでは、子どもの人数が1人の場合は「わからない」という回答が多く、2人の場合は「はい」という回答が多かった。つまり育てている子どもの人数が1人より2人というように、増えた場合の方が親は、自分の考え方が柔軟になったと回答しているのである。このことから親は子育ての経験を通して次第に考え方を変えていくという発達を示すことがわかる。

④ 夫婦を1組にした分析——回答の一致率の高低に関して

次に夫婦の回答の一致率を相関係数を用いて分析した。その結果、最低値 -0.053 から最高値 0.842 までの分布を示し、相関係数の平均値は 0.436 となった。したがって、夫婦同士の回答の間にはやや関連性があると考えられた。

夫婦の相関係数の高い群と低い群を相関係数の平均値 0.436 を境にして分類 (各群 8 組ずつ) し、父と母を別にして群ごとに親の発達項目の得点と関連を調べた結果、父における人間的に成長したという項目を除いたすべての項目 (親になって考え方が柔軟になった、精神的に強くなった、視野が広がった、自分をより大切に思うようになった、母における人間的に成長した) において、夫婦の回答の相関係数 (一致度を示す) が高い群は低い群よりも、母においても父においても親としての発達を感じている回答者が多いことを示した。

夫婦同士の考え方が一致していれば、子育てにおいても協力しやすいと考えられるが、それだけでなく、親としての発達が著しい可能性が示唆された。

4) 調査結果のまとめ

本研究ではデータ数が少なく、子どもの年齢や人数による回答の差などを十分に分析することができなかった。本研究の結果については、データの少なさが現状を十分捉えているとは言

いがたい面を作っていることに注意すべきであるが、ここで読み取れることから考察を試みたい。

親の発達については、親になって視野が広がったという回答が比較的多く、親が子育てを通して人間的に成長していく可能性を示唆するものとなっている。親の発達を示す質問項目は「わからない」という回答が多く、親自身がはっきり認識していない場合が多いことを示している可能性もある。親の発達は子育ての中で、少しずつ形成されていくものだとするならば、子どもの年齢とともに発達の実感が増すことも考えられる。この点を明らかにすることは今後の研究の課題である。

また父親と母親では、自分の両親（子どもの祖父母にあたる）との会話の量に大きな違いがみられた。親への援助においては父親の援助と母親の援助を分けて考える必要もありそうである。これまで子育てをしている親といえば一般的には母親を意味することが多かったし、研究においても母親を対象としたものが多かった。しかし男女共同参画社会の形成について叫ばれている現在においては、子育てする親として父親はこれまで以上に役割を果たすことが求められている。このときに父親と母親とでは子育てサポートを受けている点において違いがあることに注意する必要があることを本研究は示唆するものである。

また育てている子どもの人数と親の発達との関連では、親になって考え方が柔軟になったという点で違いが見られた。すなわち、子どもの人数が1人の場合は「親になって考え方が柔軟になった」の回答が「いいえ」が多く、子どもの人数が2人の場合は「親になって考え方が柔軟になった」の回答が「はい」が多かった。このことは子どもの人数が2人の場合は親の考え方が柔軟になる傾向を示唆するものである。つまり親は子どもの人数が増えて子育ての経験が積み重なるにつれて、考え方が柔軟になるという傾向を本研究の結果は示唆するものである。今後の研究で親の発達をより詳細に明らかにすることが課題である。

文献

- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達 発達心理学研究,5,1,72-83.
- 小嶋秀夫 1989 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫(編著) 乳幼児の社会的世界 第9章 有斐閣選書
- 林 昭志 2005 親を生涯発達の観点から捉える心理学的研究の試み 上田女子短期大学紀要第28号 pp.11-18.
- 汐見利幸 2000 無免許運転?の親を励ます 発達 84号 ミネルヴァ書房
- 大日向雅美 2005 「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない 岩波書店